

機関番号：11201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21720133

研究課題名（和文）ロシア語の動的事象の推移の記述にみられる言語的世界像

研究課題名（英文）The Russian Worldview Reflected in the Description of Situations.

研究代表者

金子 百合子（KANEKO YURIKO）

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：80527135

研究成果の概要（和文）：動的事象の推移において「限界」の概念はロシア語の言語的世界像を形成する意味的優勢素として提示されてきた（ペトルーヒナ）。事象の安定的側面を優勢的視座で記述する日本語と対照させることによって、日本語と比較した際のロシア語における「限界」の際立つ優位性を検証した。当概念の優位性は、終了限界性に基づくアスペクト的動詞分類、結果を修飾する動詞語形成手段の多さ、和訳における限界的解釈の希薄さ、アスペクトの文法範疇の主導的役割といった点に特徴的に現れる。

研究成果の概要（英文）：The notion of “limit” has been studied as one of the semantic dominants, forming the Russian language world view, sprachliche Weltansicht (E.V. Petroukhina). In comparison to Japanese, which prefers depicting “stable” phases of situations, the dominant features of Russian “limit” have been proved in such spheres as the telicity-oriented aspectual classification of verbs, the wider variation of verbal derivational strategies with resultative modifications, its weaker reflection in Japanese translation, the more independent manifestation of its aspectual category.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：ロシア語、日本語、アスペクト、限界、意味的優勢素、言語的世界像

1. 研究開始当初の背景

当研究は(1)アスペクト研究の中に(2)言語的世界像の視点を取り入れるものである(3)。

(1)時間軸上での動的事象の存在様式と、その言語上での記述のし方を論じるアスペクト研究はロシア語をはじめとするスラヴ諸語を土台に理論的・方法論的に発展した。ア

スペクト研究の一つの主流として不変意味の模索があり、ロシア語の動詞アスペクト体系において有標の完了体は「ひとまとまり性」や「限界性」といった意味を有するとされる。また、言語普遍的な意味カテゴリーとしての「アスペクチュアリティ」を根拠にスラヴ諸語以外の言語との機能意味的な対照研究が盛んである。日本語のアスペクト研究

はテイル形の意味分析を中心に 50 年代から飛躍的に発展し、テイル形の不変意味として「状態」、「継続性」、「完了」等の候補が提示されている。しかしロシア語のAspect体系と日本語のそれとがどう異なるのかを詳細に論じた研究は無かった。

(2) 認知言語学の理論的発展および概念分析のアプローチ法の確立を背景に、フンボルトの言語哲学「言語的世界像」が改めて脚光を浴び、言語普遍性と言語相対性の相関性が論じられるようになる。言語相対性は当該言語文化全体を貫く「基盤概念」(ヴィエジビツカ)、「意味的優勢素」(パドゥチェヴァ)として言語内に顕在化する。言語的世界像の研究対象は語彙やイデオムを中心に研究されており、Aspectの意味範疇に代表されるような「動的事象の推移」がその研究対象になることは稀であった。

(3) 従来のAspect対照研究では問題となる言語外現実の同一性とその一義的な解釈を前提に、その対象言語間のAspect的表現の差異を論じたものが多い。研究代表者は先行研究で文法的、語彙的、語形成的に重要な意味=概念である《限界》をロシア語Aspect体系の意味的優勢素と仮定し、その優勢的な振る舞いを、部分的な開始意味野に限定し、日本語との対照において検証した。しかし《限界》がロシア語の意味的優勢素のひとつであるならば、検討範囲を広げ、そのロシア語全体を貫く体系性を立証する必要があった。

2. 研究の目的

本研究の主要な目的は、ロシア語の言語的世界像の一端を担うと考えられる動的事象の推移の記述 (Aspect) に見られる《限界》の概念の、日本語と比べた際の、優勢的振る舞いを、動詞Aspectの表現だけではなく、動詞語形成、名詞語結合、統語構造等において検証し、言語を貫くその体系性を検討することである。その結果として「ロシア語の動的事象の推移の記述にみられる言語的世界像」を明らかにすることを研究の目的とする。

3. 研究の方法

ロシア語と日本語のAspect機能意味体系より作業仮説的に取り出した各言語の意味的優勢素を、まず、各対象言語の構造の中で位置づけ、その後、文学作品の原文と翻訳や言語テストなどの多様な言語資料を用い両言語のAspect的表現を対照させ、各言語の意味的優勢素の正当性を検証する。

意味的優勢素の特徴とされる、他言語と比較した際の、(a) 豊かな意味的、形式的差別

化、(b) 発話での高頻出度、(c) 表現の低い意図性、(d) 翻訳上の困難、についてそれぞれ確認し、意味的優勢素の検証を行っていくことが具体的な作業プロセスである。(a) に関しては、任意の意味野における語彙/語結合の種類が多さ、意味内容の詳細さや多様さがその指針となり、(b) に関してはコーパスデータ等を用いる。意味的優勢素は (c) 表現の低い意図性という点で文法的意味にも似る。(d) 原文と翻訳の比較は、それが翻訳される言語において最大限の自然さを要求するという点に、翻訳元言語における言語相対的な特徴が露わになる。

4. 研究成果

(1) 語形成体系における《限界》の豊かな意味的・形式的差異化—ロシア語の接頭辞の多くは基盤動詞を完了体化するのでその派生動詞は明確な文法的限界性を獲得する。中でも結果動作様式に属する接辞は形式的、意味的に詳細に差異化されている。一方、完了体化する接辞は少なく低強度や反復といった意味を加えるのみである。ロシア語において特に基盤動詞と体ペアを構成する完了体派生動詞はその語形成意味が既に基盤動詞が指示する過程の当然の結果として潜在的に語彙意味に組込まれているため、動作の結果はある特定の語形成意味を有する派生動詞で表す語彙文法的な必要性がある。日本語の場合、動作の結果を表す複合動詞の使用は語彙的、恣意的である場合が多い (разрезал арбуз на четыре часть — スイカを4つに切った/切り分けた)。また、日本語の複合動詞が動作の結果を明示する場合、それは先行過程の遂行に関しても何らかの補足的な、往々にして主観的評価の加わった情報を与えることがある (написал письмо — 手紙を書いた/書き上げた)。このようにロシア語の動詞語形成手段には基盤動詞を完了体化して動的事象の「仕切り」を表すものが多く、その使用は現実の動的事象の記述に際して語彙文法的に要求されるのに対し、一方の日本語では「テイル」「テアル」「テイク」「テクル」などの補助動詞を用いて動的事象の状態や過程などの「延びた」側面 (安定的側面) を取り上げる手段に富むことは象徴的である。これらの補助動詞を語形成分野に含むことには異論もあるが、動的事象の複合概念を表す語彙文法的手段として検討の対象に含め、両言語の語形成分野におけるこの対照的な分布の差異は各言語においてAspect表現を生み出す優先的な視座が異なることを表すものと考えられる。

(2) 動詞語彙における限界性の解釈の差異—「限界」の概念は長い間Aspect的意味特徴のうちでも重要なもののひとつとみな

されてきた。特に動的事象の「仕切り」を有標とするロシア語において「限界」の重要性は強調しすぎることはない。一方で、事象の「延びた」側面を多様な手段で表わす日本語において「限界」という概念はロシア語におけるほどには有意味ではないと考えられる。限界性をスラヴ諸語を対象に検討したマシロフと、日本語を対象にしつつ普遍的な動詞意味特徴としてそれを位置づけたホロドヴィッチを詳細に検討した結果、各々の限界を導き出す視点が異なると結論づけた。前者は過程の自然な終了を目指す「過程→(終了)限界」であり、後者はある唯一の結果(=テイル形で表される結果状態の意味)を導く前提として先行過程の限界を想定する「(開始)限界←結果状態」である。この視点の違いにより、両者による限界動詞の分類が一致しないことが説明される。ロシア語における典型的な限界動詞は、終了へ向かう過程を意味する不完了体動詞とその過程が終了限界に到達したことを表す完了体動詞が体ペアを形成する終了指示動詞であるが、日本語では、限界の意味を積極的に含むのは結果動詞(主体変化動詞)であり、主体の状態を変化させない他動詞による限界の指示は希薄である。この差異は両言語の結果否定構文で如実に現れる。例：решал задачу, но не решил ее - 解いたけれど解けなかった; долго строил дом, но так и не построил - 家を長いこと建てていたけれども、結局完成しなかった。この種の文はロシア語では終了指示動詞の体ペアを検証する構文として使用され、行為の過程と結果が不完了体動詞と完了体動詞によるアスペクトの文法的意味の差異によって役割分担される。一方、日本語では前件で表わされる行為の過程には他動詞が用いられるが、後件で表わされる行為の結果は往々にして自動詞もしくは自動詞的な表現(受身表現、可能表現)が登場することが多く、ここで日本語の場合、他動詞における限界性の弱さと同時にアスペクトとヴォイスの文法範疇が交差することになる。

(3) 日本語翻訳に映し出されるロシア語の《限界》—ロシア語の完了体動詞が主張意味として表す「限界到達」は、それを積極的に意味しない日本語上でどのように反映されているのかを、文学作品としての完成度と翻訳先言語の自然さが要求される翻訳文学において考察した。テキスト構成においてアスペクト表現はタクシス表現としての機能を果たし、その中で限界到達の意味を持つ完了体動詞は個別出来事を場面に導入し、物語を展開させる。同じ機能は日本語の場合、ル(タ)形の単純形が担う。その機能においては記述される個別行為の導入がロシア語のように有標の完了体動詞で明確な「仕切り」

として詳細に明示されようと、日本語のように限界の指示に対してはニュートラルな無標の単純形で表されようと概ね一致し、したがって、ロシア語における限界意味の有意性が日本語テキストにおいて捨象されることで翻訳の際に何らかの技術的な問題が生じるようなケースは少ない。しかし一方で、以下に述べるように、義務的ではないものの、翻訳に際して多用される日本語表現に関連性が疑われる事例がある。日本語において使用頻度が高く、アスペクトとの関連性も指摘されている「テシマウ」「テオク」「テミル」とロシア語との相関についてであるが、アルパートフが「“非標準的”アスペクト形式」と名付けたこれらの形はアクチュアルな意味でロシア語の完了体動詞に相当することが多い。

①テシマウ形についてはこれまでもソ連の日本語学で日本語の完了アスペクトとしてみなされてきた経緯がある(ホロドヴィッチ、フェリドマン)。例：К тому же, падая, я (a.)сломал руку. Точнее, не (b.)сломал, а повредил. - さらに倒れるとき、ぼくは腕を(a')折ってしまった。より正確に言えば、(b')折ったのではなく、傷つけたのだが、(ドヴラトフ『かぼん』)、ロシア語において限界到達事態は、通常、出来事として完了体動詞が文法的に表現する(a,b)が、日本語における出来事は限界到達と必ずしも結び付かないために、限界到達を強調するには「不可逆性」を意味するテシマウ形で語彙的に、主観的評価を加え、表現されているのではないかと考えられる(a')。

②日本語訳の(b')はノダ文で動作が名辞化され、出来事の記述というよりは動作の名指し機能が前面に出ていると考えられる。動作の名指し機能はロシア語では限界到達に対してニュートラルな不完了体動詞が担う機能であり、特にその一般的事実意味に関係する。一般的事実意味は不完了体動詞が積極的に表す過程の取り立てと密接に結びつき、現実の結果を意図的に無視することで、事態に対する話者の主観的評価を表し、行為の帰結への説明を求める場合もある。ロシア語の出来事文がノダ文が持つ事態の説明や名指し文として言語処理される実態については、より詳細な検討が必要である。

③語りの文で、ロシア語の完了体動詞が「新たな状況の開始」という側面を前面に出す時、その日本語訳にテミル形が登場することがある。例：Я надел куртку. Она была мне впору. /ぼくはジャンパーを着てみた。ぼくにぴったりだった。(同上)。しかし、このテミル形はロシア語の試行動詞(по)пытаться / (по)стараться とは大きく異なる。ロシア語の試行動詞は、対象となる動作の望ましい限界到達(=成功)を目的に試みることで、当該

動作のみで意味的なまとまりをなす。一方、テミル形における“試行”の目的は必ずしも動作の成功にはなく、当該動作の境界を越え、関連する別の状況の評価することにある。完了体動詞とテミル形の相関関係には、個別動作の動作主としての主体の視点が優勢なロシア語と、連続する諸状況の観察者としての主体の視点が優勢な日本語との対立が見て取れる。

(4)今後の展望一言語的世界像の研究は対象となる言語事実の絶対的な有無を問題にするのではなく、諸言語を対照することで浮かび上がる言語相対的な特徴と傾向を言語の内的構造のみならず広く言語活動を含めた複数の視点から客観的データを示し検証・記述することが重要になる。そのためにはコーパスを整え、本研究で考察した個々のケースについて使用頻度の数値データをもって検証にあたらなければならない。また、日本語と対照する中でアスペクト範疇だけではなく、ヴォイスやモダリティといった各言語における諸文法カテゴリー間の相関、もしくは文法範疇のヒエラルキーという観点からの考察、ノダ文のように統語的に現れると考えられる事例の検討、さらには翻訳文学のテキスト構成における両言語間での意味的優勢素をめぐる言語処理の実態について考察が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①カンエツコ ユリコ、Выражение субъективной оценки общефактическим употреблением НСВ в русском языке и его отражение в японских переводах、岩手大学人文社会科学部国際文化課程欧米言語文化コース欧米言語文化論集、2012、87-104

② カンエツコ ユリコ、Отношение к пределу глагольного действия в японском языке в сопоставлении с русским、Антропология языка、Вып.1、2010、58-80

③金子百合子、ロシア語と日本語の動詞が含意する「限界」についての一考察、ロシア語研究、査読有、第22号(2009)、2010、13-42

[学会発表] (計6件)

①カンエツコ ユリコ、«Нестандартные» видовые формы японского языка и субъективно-оценочное восприятие действия: на материале переводов русских художественных текстов、III Конференция

Комиссии по Аспектологии Международного Комитета Славистов «Глагольный вид: грамматическое значение и контекст»、2011.10.1、パドゥア大学 (イタリア)

②カンエツコ ユリコ、Проблема интерференции языковой картины мира при обучении русскому виду в японской аудитории、IV Международная научно-практическая конференция «Русский язык как иностранный в современной образовательной и геополитической парадигме»、2010.11.19、モスクワ大学 (ロシア)

③金子百合子、動的事象の記述におけるロシア語の限界重視と日本語の限界軽視、日本ロシア文学会東北支部研究発表会、2010.7.3、岩手大学 (岩手県)

④ カンエツコ ユリコ、Разработанность идей «предела» и «стабильности» во внутривидовой деривации русского и японского языков、IV Международный конгресс исследователей русского языка «Русский язык: исторические судьбы и современность»、2010.3.21、モスクワ大学 (ロシア)

⑤金子百合子、「限界」意味概念の広がり、第59回日本ロシア文学会全国大会、2009.10.25、筑波大学 (茨城県)

⑥ カンエツコ ユリコ、Петрухина Е.В.、Аспектуальные классы глаголов: универсальные и идеотинические признаки (на материале русского и японского языков)、II Международная научная конференция «Типология вида / аспекта: проблемы, поиски, решения»、2009.9.24、アイトドールユック (ウクライナ)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金子 百合子 (KANEKO YURIKO)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：80527135